

平成 27 年度 香川大学

瀬戸内圏研究センター特別シンポジウム

[本城先生]

おはようございます。時間になりましたので、ただいまより瀬戸内圏研究センター特別シンポジウムを開催したいと思います。私は瀬戸内圏研究センターのゼネラルマネージャーをしております本城^{つねお}凡夫でございます。本シンポジウムの司会・進行を務めさせていただきます。ご協力の程、よろしくお願いいたします。

今回のシンポジウムはここに書いてありますように、「瀬戸内法を制定して 40 周年。瀬戸内海国立公園指定 80 周年を終えて」というテーマに、「身近な瀬戸内海の過去、現在、未来という副題」が付いております。

それではシンポジウムの趣旨説明を含めて、多田^{くになお}邦尚 瀬戸内圏研究センター長に挨拶をいただきたいと思ひます。

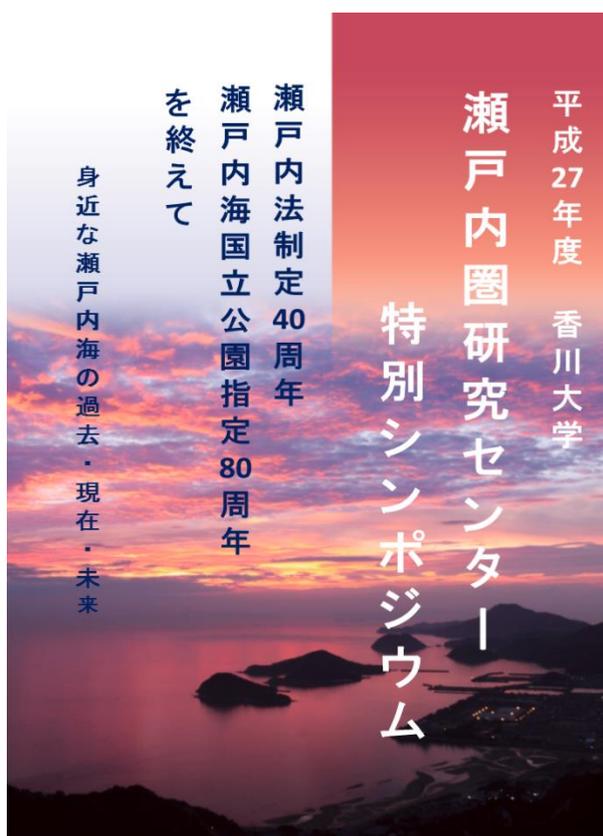
[多田先生]

皆さん、おはようございます。瀬戸内圏研究センター長の多田です。今日はお忙しい中、私達のセンターのシンポジウムにご参加いただきまして、ありがとうございます。

香川大学では過去長年に亘って瀬戸内海に関する研究・教育を実施してきました。そして、その成果を踏まえて平成 21 年の 3 月に、学内に瀬戸内圏研究センターが設立されました。センターの設立目的というのは「瀬戸内圏地域が抱える諸問題の解決に向けて、瀬戸内圏研究を推進するとともに地域の知の総合拠点となることをめざす」ということです。

そして、当センターでは毎年この時期に、センター関連教員の学習の場、あるいは研究推進のヒントを得る場、また地域の方に瀬戸内圏に関する情報を発信する場として学術講演会を開催しております。

センターは今年 6 年目を経過して 7 年目に入りましたけれども、瀬戸内海はポスターに書いておりますように、一昨年は瀬戸内法という法律が制定されて 40 周年、去年は瀬戸内



海国立公園指定 80 周年というメモリアルイヤーを迎えました。そして、一昨年、去年と様々なイベントが開催されましたが、私はこれらのイベントが「お祭りの要素が大きいな」というように感じていました。今、瀬戸内海はいろいろな問題の節目にも当たっており、当センターとしては「地域に根ざした大学として情報発信をするとともに、大学として今一度身近な瀬戸内海の過去と未来を考えて、その上でセンターとしての役割を考える機会を持ちたい」、そのように思いまして、例年の学術講演会を特別シンポジウムという形に変えて開催させていただくことにしました。

今日は 6 名の方に講演をお願いしています。まず、最初の講演ですが、香川県はたくさん島の離島を抱えており、その島の過疎化と医療人材の不足が問題になっています。島のお年寄りに一番心配なことはなんですかと聞くと、必ず「お医者さん」という言葉が返ってきます。そのような中で瀬戸内圏研究センターの原量宏^{かずひろ}先生が K-MIX+ を立ち上げました。この K-MIX+ のプロジェクトの中で出てきたのがオリーブナースです。今日は綾川町の国民健康保険 陶病院の大原先生に「高齢化と医療人材の不足。そしてオリーブナースの役割」についてお話をさせていただきます。

2 番目の講演はさぬき市の学芸員の山本さんをお願いしました。瀬戸内海国立公園の父と言われている小西和^{かすか}についてお話しをさせていただきます。小西和がいなければ瀬戸内海国立公園というものはあり得なかったわけです。その小西和の功績、あるいはお人柄について知りたいと思っても、小西和に関する伝記のようなものが出版されていないので、今日、ここで山本さんのお話を聞くことでしか、我々は小西和の人柄・功績について知ることができないわけです。

3 番目にはお遍路の話です。四国といえばお遍路さん。だけど香川大学の学生さんに「四国遍路ってなに」と聞いたら、「88 カ所を回って行くやつ・・・」と、それ以上の答が返ってこないのです。私の認識もそれとあまり変わらないのですけれども、そもそもお遍路というのは弘法大師が修業して歩いた道をたどるということであって、僧侶や行者が修業としていたのが本来の四国遍路のはずですが、いつの頃からか一般庶民も四国遍路として歩くようになったと思っています。今日は「四国遍路の起こり、現在までの変化、それからその独特の文化」について、香川大学経済学部の稲田先生にお話をさせていただきます。最近、稲田先生は「四国徧禮道指南^{へんろみちしるべ}」という本を講談社から出版されました。会場の入口に置いている本です。これも瀬戸内圏研究センターの研究成果と考えています。

4 番目の講演ですが、ここ香川県では瀬戸内国際芸術祭が今まで 2 回開催されており、来年は 3 回目の開催が計画されています。香川県はこの芸術祭を「島に多くの人々が訪れて大成功」と評価しています。ただ島に人が来るということが、一過性やイベント的なものであってはいけないので、今日は島興しや島のあり方について、名古屋大学文学部の室井先生に「離島のアートプロジェクトと地域活性化」というテーマで、お話しをお願いしました。室井先生は瀬戸内国際芸術祭 1 回目の頃に香川大学教育学部におられたので、今日の話も瀬戸内圏研究センターの研究成果かなと思っています。

5 番目の話は水産のお話です。我々瀬戸内に住んでいる者としては、美味しい魚が獲れて食べることができて初めて豊かな海・里海だと考えています。「水産業なくして里海なし」というのが私の信念です。ところが若い人の魚離れが進んでおり、魚が売れなくなると里海がつぶれてしまうということになります。そういった意味で、水産業と魚の流通と消費、それから沿岸漁業の将来について、今日は鹿児島大学 水産学部の佐野先生にお話をお願いしました。佐野先生は最近「日本人の知らない漁業の大問題」という本を出されて、テレビにもよく出られている方です。佐野先生は、僕の疑問「この高松、香川県で『新鮮市場きむら』がなぜこんなに栄えているのか」に、「それはね」と言って話して下さいました。今日はその話も聞けるかも知れません。

最後の 6 つ目のお話は四国新聞社の泉川さんにお問い合わせしました。泉川さんは四国新聞社で、記者やデスクとして長年瀬戸内海を見つめてこられた方です。平成 12 年頃、瀬戸内海は海砂利採取問題で非常に騒がれました。そんな中で「この報道が海砂行政を変えた」とまで言われた平成 12 年当時の四国新聞のコラム「連鎖の崩壊」。泉川さんはそのデスクを務められた方です。泉川さんには「報道の立場から見た瀬戸海の過去と未来」についてお話をさせていただこうと思っています。

以上 6 名に講演をお願いしましたが、私自身、記念シンポジウムにふさわしい方々に来ていただくことができたと思っています。今日は 5 時までの少し長丁場になりますが、どうか最後までよろしく願いいたします。

[本城先生]

多田先生、ありがとうございました。それでは早速、講演に入らせていただきたいと思えます。各テーマは講演が 40 分、討議を 10 分というように計画しておりますので、よろしく願いいたします。